

第十一回名田庄多聞の会

池田町の元気のひみつ

早川 みなさんこんばんは。時間になりましたので、名田庄多聞の会をただいまより開催いたします。

今日は第十一回になりますが、今年度三回目の最後の会になりました。今日の講師は池田町から来ていただきました、米作農家の伊藤弘文さんです。伊藤とは、プライベートな話になりますが、うちの女房が武生の「土といのちの会」で伊藤を知って、そのときの農業に対する姿勢に共感し、それ以来美味しいお米をいつも年間契約で頂いていまして、ぜひ一度来ていただきたいと思っていまして、やっと念願かなった次第です。それで、いつものように今日は一時間ほどお話、そのあと一時間半ほどは、質疑応答、まあ座談会みたいな形になりますので自由にお話して欲しいと思います。伊藤さんどうぞ。

伊藤 こんばんは。池田町からやってきました伊藤博文と申します。今晚は。ひとつよろしく願います。僕はただの百姓でありまして、しゃべるのは苦手ですが、題を、「元気な池田町のひみつ」なんて頂きましたが、秘密なんかあるわけがないんで、そんな話なんて、できるのかなあと、いまでもまだ思っています。どうぞよろしく願います。

青年団活動

まず、手短かに僕の生い立ちといいますか、話させていただきます。

昭和四十八年に高校を卒業しまして、宝塚の方に植木職人のところに行きました。四十八年はオイルショックの時なんです。トイレットペーパー事件のあった年です。そこで習ったのが植木の生産ですけど、それまではやっぱり、安かろう悪かろう、儲ければ何でもいいや、みたいな時代やったのが、本物を作って売っていかなあかんっていうのは、叩き込まれました。それが未だにきているのかなあって感じています。で、帰ってきて一二年間っていう約束で親に出させてもらっていたので一帰ってから植木の生産と造園と、で、ちょうど農業機械なんか入って、あのコンバインや田植えのオペレーターの仕事があったもんで、そういうのを色々こちゃこちゃしながら、暮らしていました。帰ってすぐ青年団に入って、池田の青年団の活動も一緒にしていました。

五、六年池田にいて、僕の世代が六人か七人いたんで、団長になっていくのも順番になつていったみたいで、県の連合青年団の事務局として、一年福井にいました。そのときに福井県中の青年団を走って歩きました。名田庄にも寄せていただきました。そこで担当したのが、清水町で開催される、若文って言うて若越青年大会文化部門っていうのを、郷土芸能あり、論文発表あり、なんでも色んな部門に分かれて、福井県中の青年団が集まって発表するんですね、それで一等取ったら全国大会にいける。演劇なんかもかなり本格的なグループなんかがありました。で、そんな準備をして、これ池田でやってみたいなって思ったのがそのことでした。そして次の年が名田庄でありました。嶺北丹南嶺南って持ち回りになるもので、そのときに何とか、それまでは池田は、今立、南条、今庄ですかね、とは仲良くしてたんですけど、あまり外の青年団とはほとんど交流していなかったんですね。これいっぺん外に見せてやろう、こんなにすごいのをやってるって見せてやりたくてね。名田庄へ来ました。

で、出すものは何にもないから、前夜祭に俺らのつくったお神輿もついでいこうかって、それで四トントトラックとマイクロバスとで乗り付けて、前夜祭でひと暴れして、「俺らのとこで、やるぞ、やるぞ」って、三年かけて池田でやりました。当時、幽霊団員って言葉を使ったんですけども、まあ含めても四十人くらいやったのを、百二十人くらい、池田町の若衆全部集めてきて、そんな話をして、やりました。

その頃は何が哀しいって、例えば武生行つて、「池田です」って言われたいんですけどね。池田の山家(ヤマガ)と馬鹿にされると思つて、池田の人間って言われたいんですけどね。僕はそんなこと思わんようにしようと思つていたから「池田です」って言うんですけど、例えば一緒に池田の人が「どこから来たの？」って言われると、「今立の方です」とか(笑)、池田の名前を出さないんですね。何と情け無い、と思つているけれども、確かに恥ずかしいんですね。「池田です」って言うのが。言えば、「あんな田舎から」って言うふうには、山家からって、必ず言われるもんやから、ま、そういう思いが、ずっと中にありました。まあ、すごい批判ももらいましたけど、ちょうど僕が団長をして若文をしたときは、今になればね、面白いことやつたなって、言ってくれますけど、まあ、非難轟々でした。むちゃくちゃやりましたもん。でも、若い時にそつした涙を流しとくもんやなって、そういう信念もありましたし、出来ました。

農協青年部

それから、まあ僕らの同世代が青年団を卒業して、なんかしようで、つて、このままやったら、今までしていたんは何やったんや、つてということ、農協青年部をつくりました。ま、現在の町長が農協の職員をしてまして、まあその時專業農

家、僕一人やつたんですけど、町長が、ずっと農協で生きていくためには、農協青年部なんか作つて後押ししたらしいやろつていうぐらいの考えで始めたんですね。

まあ農協青年団で田んぼの一枚も作ろう、畑も作ろう、何か特産を作ろうつて、まあできないんですけど、一番最初に思いついたのは、田んぼの畔端で一服するわけですね、まあ僕は普段から一服、慣れてるけど、会社勤めしている子らは、一服して、こりや女の子交えてやると面白いなあつていう発想で、やろやろつて。女の子よんで酒一杯飲ましてやろつて。「体験ザ百姓」って言うのをしました。で、とても広告宣伝の金はないからどうしよう。こりや、ラジオ局に乗り込もう。で、新聞の記事になるような事やつて来い、記事にすれば新聞社来てくれるし、広告料いらんしな、つて言うんで、皆して車一台乗つて、大阪までいって、大阪の、FM大阪はもちろん朝日新聞社も、ちょうど事件のあった年やったから入るまでがすごい厳しいかったですけれども、記者が会つてくれて、あつちやつちやら手分けして、記事にしてもりました。最初はあんまり来なかつたんですけども、やるにかかつたからには、やるぞ、つてんで、段々段々大盛況で、耕運機乗せてやつたり、やりました。

で、そのときに、いつも飲んでやるんですけど、飲んで出て出た話が、池田のオバちゃんらが家庭菜園で作る野菜が、食べるだけ食べたら、畑で捨てられるんですね。これ集めて福井もつて行つて売つたらどうやろつて、というアイデアが出たんですね。でも、現実には、そのとき話だけやつたんです。もうそれで済んで、もうそんだけ難しいシステムも作れないし。それが今の池田町の「こぼい屋」の発想で、今の町長になつてからの発案ですね。そういうのがあつて、町で農林公社を作つて、まず池田の作れない農地つていうんか、農地を守れつていうのと、売上げを、可

処分所得をあげるついでなのか、とにかく池田に少しでも金を引っぱってこれる方法を考えよ、って言うことで、あの、ベルっていうショッピングセンターにアンテナショップを作ったんです。それは百パーセント公費で作って、今現在、朝の五時ごろから二トントラックの冷凍車で、保冷車って言うんですか、池田の町中歩いて、そのオバちゃんらが村の拠点に皆つめて、野菜とかを出すんですね。それを持っていつて、ベルで売る。一応、成功っていうんか、売上げとしてはかなりの売上げを上げるようになっていきます。

「100坪の屋」と「100坪の会」

これ後で聞いた農林公社の社長の話なですけど、「池田のもんやで農業かかってへんやろ」。なんていうか、水が綺麗なことやから野菜も綺麗やろ、って、お客さんがそう言うってくれるっていうんやね。現実には農業もかけてあるし、おばちゃんにもそういったのをさせたわけじゃないから、池田の山から持ってきたものはましとしても、最初は畑で作ったものは何でも持っていたわけですから、言われたたんびに「これはなんとかせなあかん」と思ったらしいんですね。で、「100坪の会」っていう生産者の会を作りまして、「有機の里池田」作りの構想を進めてきたというのが、元気に映るんかなって思います。確かに池田のおばちゃんは元気です。まあ、ふきのとうなんか、うちの畑にあるのは確かに見えますけど、田んぼのぐるりになんかありません。もう綺麗にとつてあるんで(笑)。競争です。山のもそうです。わらびもぜんまいも何でも、もう、ちよつと僕らには取れません。まそのくらい元気ですけれども。

ま、良かったと思うのは、「池田です」と皆胸張って言えるようになったなとい

う事。そんな感じですね。だから僕がしたとかそんなでもないし。資料に、「100坪の屋」と「100坪の会」の憲章が書いてあります。みんなの申し合わせ事項みたいなのがしてあります。

で僕はそのまま農業をしながら、福井県の青年農業士っていうのに認定されました。農業士会の活動をしていたら、たまたま事務局が廻ってきて、事務局結構いいかげんなんです、事務局ちよつと整理したら会長になってしまっています。福井県中、お百姓なかがいつばいできてしまっていて、すごい勉強になりました。でひとつ思ったのが、その近くに鯖江に「内田農産」って、福井で一番大きいんじゃないかと思うけど、米農家がありまして、もうポニー(朋友)ですけど、一緒に話しているうちに、「こいつらと一緒に土俵には立てんぞ」と思った。池田と鯖江との規模の違い。池田ではいくら田んぼ広げても、田んぼと一緒に畔がついてくるもんで、まあ、とてもコストを下げるとか、そんなことで勝負をしたかつて生きてはいかれないぞ、っていうのがしみじみ感じました。廻れば廻るほど感じましたね。それでも僕は作業請負なんかでは、自分のコンバインは福井で一番動いたんではないかな、って思っています。よその二十五、六町。自分の十町。一台のコンバインで動かして、農家行つて動かしていました。だから対等に話も聞いてくれたんじゃないかと思えますけれども。

そして結婚して明るる年に、長男が生まれました。ちよつとアレルギーを抱えて。自分が大規模農家と同じ土俵に立ってないっていうのと、自分の子供にアレルギーが出て色々あちこちお医者さんにも連れて行つたし、色んな施術も受けたし、けれど、やっぱり食べ物の大切さ、大事さみたいなのが、食が基本というのを子供を持って初めて判ってきましたね。その時に武生に「土といのちの会」というのを作りたいんやという話が出た。武生の僕の百姓仲間、その前進が「航空防除

反対」っていう、ヘリコプターで空中散布していたもんで、「航空防除反対の会」っていう市民団体があつたんですね。だからそこそこ丁々発止喧嘩をしていたもんで、あんなこと、っていう話も聞いてました。百姓仲間としては。それで僕に大久保圭子さんっていう、今は武生の市会議員をしているんですけども、電話がかかってくる、「私たちも気がつきました。喧嘩をしてはあかんっていう事を、農家が一番農薬を浴びているんやっていうことを」それで一緒に勉強しませんか、っていう誘いを受けました。農家と一緒に手をつないで、考えていきたいんやっていう。そういう会をつくりたいんやっていう話を頂いたので、それなら僕行きます、って。

で、発会当時から参加してましたが、環境問題は女子供のすること、って。今でこそ皆環境・環境って言うようになりましてけど、生ごみの処理の問題やら、もちろん農薬の問題も含めて一緒に活動に取り組んできました。一緒に田んぼも作って、色んな勉強を一緒にして、活動を一緒にしてきました。

そのおかげさんで、本当に鍛えてもらえました。まずお客さんに鍛えてもらいましたし、会の人にも鍛えてもらいましたし、それが今の池田の「有機の里池田」作りのひとつの点になっているという思いがあります。今はもう、会がどんどん発展して、池田には環境団体だけでも四団体ありまして、例えば生ごみのリサイクルを月水金で、家で出る生ごみを新聞紙に包んで、「有機JAS」では新聞紙のインクがダメだといわれるんですけど、まあ新聞紙で包まんと水分の始末が出きんもんで。新聞紙に包んで紙袋に入れてそれを「ごみステーション」に出すと、月水金にボランティアで集めて堆肥センターで生ごみを堆肥にしてくれるんです。六ヶ月かけて「ど根性」っていうものすごい堆肥を作ってくれます。まあそれは生ごみと牛糞と米ぬかと、大体そういうのを入れてあ

ります。それから、液が下にしみこんで出てくるんですけど、それは「ど根性の汗」って名付けて、それは稲の苗なら原液を、種まきの時に農協堆肥センターに肥料代わりにそれをまいてみます。それから十日くらいしたらまたひと箱当たり五〇〇cc撒くと、それで充分良い苗に育ちます。それで稲の苗も池田では未消毒の無農薬の苗を農協が供給できるようにになりました。

それらは農協やら役場がするんですからすごいいい施設、日本中から見学者が来ます。すごいいい施設ですけど、僕は自分の米は最初風呂桶でお湯沸かして七〇度五分間の熱湯消毒で稲の苗を育てましたけれど。去年「現代農業」に出ていたのが、普通に飲む穀物酢の二五〇倍か三〇〇倍の液に丸一日つけておくと、これは本当にバカ苗も出ませんし楽です。熱湯消毒はまる二日間かかるんですね。まあ、うちは二三百件はつけますけれども、子袋にして、五つか七つ、七〇℃にして温度計見ながらかき混ぜて、沸かして、つけて、五分間タイマー計つて、上げるとお湯が減るんですね、上げてすぐに水で洗わんと煮えてしまいますから冷水でがーっと冷やして、そしてまた次もお湯を足して、沸かして、っていう感じで。ものすごい時間かかったんですけども、今は食酢で一〇〇パーセントいい苗が出来るようになったんで。土も僕はアルバイト使って全部土焼き機で焼いて、土も買うとね、苗の土は一トン二万円もするんで、二万円よそに払うんならアルバイトに払ったほうがいいわと思って、そのような事をしていきます。

今は結構池田でも大規模農家増えまして、最初はまあ僕一人だったんですけども、いい顔した百姓になろうって、一悔しいから、いい顔していようっていうのは常に思っていました。だから確かに五年前の水害では、うちのところが一番ひどかったんですけども、半分以上の田んぼが流れてしまっていて、それも七月ですから、もう手をかけるだけかけて後は収穫だけですよね、そうなるから、

流れてしまいました、それから去年やっと、稲出てきましたけど、おとしは悪かったんで、ずっと経営的には厳しい、借金もかなり溜まつてる状態です。まあ僕のとつてるのは大体そういうことですねえ。

百姓は百姓の言葉で世間に話を

ああ、そして、ひとつ「土といのちの会」を通して思った事は、農家は、百姓は百姓の言葉でいいんで、もつと世間にものを申すつていうのか、世間に話をしていないかんつていうのが、こんだけ知つていようでいて、まったく農家のが理解されていなのがよく分かりました。だからなお消費者と共に活動するつていうんか、行つて現場の話をする、そして少しでも話をしながら理解してもらつての一番大事なこやなつて、一番感じています。

一番いい例が、何年前ですかね、大不作の年、もう一〇年になるんですか、あの年ですね、作表指数が八〇ということ、まあ一〇〇あれば日本人が食べるだけの米あるんですけど、八〇つていうことは、二割我慢すればいいんですね。そうすると、日本中の人々が分かつたら、だれもあんな米騒動みたいなパニックは起こさないで済んだんです。だからそれを農林省は隠す、ちゃんとそれを発表する人がいないからあんなパニックが起きたんで、それは僕が高校卒業してすぐのトレットペーパー事件なんかと、全く同じやなと感じました。

僕は二ヶ月に一回、お米と一緒にうちの情報誌を届けるんですけど、今年はこのお米があります、今年はどこかで一ヶ月我慢してください、ちゃんとお客さんにはそれ発送したんですね。すると私は何月は休んでつて、皆お客さんから返事が来る。うちのお客さんは誰もパニック起こさんと済んだんですね。やつ

ばこういうつながりは大事やな、ありがたいなつて、思ったのがひとつあります。

早川 「こぼい」つて、どつていう意味ですか？

伊藤 こつぽいちゆうのはねえ、池田弁ですねえ……こつぽいこちや、ですけどね、「楽しいな」つていうんか、「嬉しいな」つていうん感じ、「楽しいな」があうんかな、そんな感じの、ですね。まあ、「ありがたいな」にも使いますし。

早川 あの、うちで話していたときに、お米の値段の話があつたんで、その説明をお願いします。

池田町の米作り栽培指針

伊藤 消費者グループとかかわりをもつたこと、そして大規模農家といつぽい友達がついて、そのとき「ああ、これは直売をしていくしか生きる道がないな」つて思つたんですね。それでそのとき値段をつけるのに、かみさんとよう話しました。まず、ひとついくらで出来るかみたいな、計算らしいものもしました。それで今のお米の値段を出したんですけども、今思えば高めですけども、まあその頃は無農薬のお米なんか自然食品のお店なんかで一〇キロ二万円なんかで売つてました。となると、やつぱり一万円以上はつけれんなつて、完全無農薬のお米は一〇キロ二万円、最初つけさせていただきました。今は八千円ですけど。

で、まあ、有機栽培を始めてもつ二十二年やつています。始めは楽やなと思つたんですけども、やつぱり有機野菜の認証が三年目からつくはずやなといつて、三年目から本当にすごいことになります。まあ、あいつに田んぼ任せて大変なことなるぞみたいな話も出ましたし、おばちゃんら何十人も雇つて草刈もしましたし、やりました。

今は機械除草ができるのと、田植え機でぼつぼつ切り替えて。やつと去年入れたんですけど、それまでも、まあおぼちゃんも限界やし、頼める人もいないし、でも信用されているお客さんを裏切るわけにもいかんっていうんで、今は機械対応で上手くできるようになりました。

今資料を分けましたけれど、僕は「極づくり」の無農薬認証を受けています。まあ池田でまだ三人ほどですけども。他の人はね、まあ去年始めてやつて、上手いきねのな〜って言ってますけれども。でもあうちの米は「匠づくり」以上の米しか作ってません。

(注記、池田町では米づくりの栽培指針を四つ設けており、「極(きわめ)」「無農薬・無化学肥料米」「巧(たくみ)」「減農薬・無化学肥料米、農薬は四成分まで」、「真(まこと)」「減農薬・減化学肥料米、農薬は四成分まで」、「舞いいけだ(まいいけだ)」「減農薬・減化学肥料米、農薬は九成分まで)。以上の四段階)

まあ、年貢の地代にする米は、まあよそから買って、現物をほしいと言われる方にはお米を持っていつています。まあ、確かに変わるもんで、へんな事をするらずつと言われ続けてきましたけども、まあ、今、池田のおぼちゃん、「こっぼや」の人、に聞いたら胸張って「有機栽培でやつてるんや」って言うと思います。

あ、これは今日来てたんで、持ってきたんですけど、冬の間、「こういう勉強会をします。(注、農薬を使わない簡単な防除方法を書いた資料) おぼちゃんらのことですから、きちんと教えて完了せんと〜」公社がやつてることなんですけど〜、内緒で薬をまいてしまう可能性があるんです。畑は月に一回必ず農協と農林科と農林公社と、で、全部の畑廻って歩きます。で、その認証をつけて行

きます。田んぼも三回は見に来ます。だから勉強するためにこういう資料を分けて、例えばカエルなんか、捕まえて、ちよつと押えてやるとげつぷ、と。カメムシなんかかなり食へてるらしいですね。

農薬を使わないから虫が退治できないんじゃないやなくて、生きる虫を、益虫を生かして退治してもらおうと。そういう考えが浸透してきました。有機栽培の基本的な考え方なんですけれども、こういうのを口をすっぱくしていつもかもうことによつて、本当に池田の農産物が胸張って金シールやら赤シールやら青シールやらを貼って出せるようになってきています。

これまあ参考までにこういう、てんとう虫や蜘蛛とか昔から言われてますけれども、こういう資料を配つておぼちゃん達を指導していますね。まあ、やりにかかると、あの人は勉強しているさかいに僕らなんかよりもよっぽど説得力もあるし、上手に教えてもらええるし。肥料袋の後ろに、NPKって番号があるでしょ。窒素・リン酸・カリの配合割合なんですけど、二つの数字が書いてあると思うんですけれど、僕が百姓始めたころはあれの読み方も知らんと僕は百姓を始めたんです。

質疑応答

早川 あの、何か質問して話を進めるのがいいとあらかじめ聞いておりますので、何でも。

私の印象では、ネーミングする人がずいぶん上手やと思つてね。例えば「ど根性とか」とかねえ。誰かやるんですか。さっきの肥料が「ど根性何とか」……

伊藤 はい。「ど根性」っていうのと、土の根の醸す(かます)、ですな。醸造の醸

醸すっていうんか、それで出てきた汁、液肥は、「ど根性の汗」つて。まあ、何かネーミングつけるのは、農協にすごい上手なやつがいるんです。最初「体験ザ百姓」つてつけるのに僕は反対したんですけど、結局それが受けましたね。でもNHKのアナウンサーは嫌がったんです。放送禁止用語らしいので、百姓という言葉は今では平気で言えるようになりましたけれど、「農家の方たちが・・・」と言ひ直しながらインタビューしてくれましたね。百姓つて、人を見下げた言い方っていうんか、放送禁止用語らしいんですね。

有機肥料

参加者 A あの、私の会社でもかなり人が辞めてね、今から二十年三十年前にも。ここにも新聞に載っているのを持っているんですけど、何十ヘクターも耕しながらやつとる方もおられるんです。昔は時々会ったんですけど、最近もがんばってやつている話を聞きまして、伊藤の話聞きながら彼を思い出していたところなんですけれどね。今日ちよつとお伺いしたいのは、もし知つておられましたら、このように生ごみでそういう害虫を減少させてきたとか、あるいはバイオの利用についてなんかやられているとか。

伊藤 あの、EM菌を使ったやつですね、米ぬかと粃殻と魚かすと、そしてEM菌と。あれはいいですね。あれをして僕も生ごみは資源やと思えましたから。ただ、生ごみ漬物みたいなのができるんですね。ちよつど、漬物と同じような甘酸っぱい匂いがして、そうすつと成功なんです。作物もよくできます。けど、夜中に狸とか猫が喧嘩するんですね(笑)。骨なんかも、鳥の骨のかたちのまんま残つてますから、もう土はむちやくちや。畑なんか掘り返されてしまうんです。作物は

ようにできるんですけど、あれには閉口しましたね。だから池田でしているのは、自動の攪拌装置で六ヶ月かけてますから、かたちもおいもみせんし、ちよつと水分は高いかなと思うけど、まあ完熟体つちゆうやつですね。池田ではそれですが、僕自身は近くに養鶏場がありまして、そこが一二〇〇羽くらいいるんですけど、そうすると鶏糞はかなりあり、前は困つて野積みしてたんですけど、よく考えたら資源やなと思ひまして。うちの家は建設業をしまして、親父は名田庄でも結構橋をかけたらしいんですけど。コンクリートの擁壁ブロックがありますね、L型のね。あれのB級品をもらつてきて、あれで囲いをつくつて、堆舎を作つて、いまそこで、常に年三、四〇トンは処理しています。僕が消費すると、鶏を飼っている人がそこに置いておいてくれるんですね。そうすつとうちが自分の米ぬかもつて行つて、混ぜ返して。だから僕はあのEM菌の発想で、あの嫌気発酵です。あとは蓋をして。そしたら中が綺麗ないいにおいする堆肥になります。そういう堆肥を使つてます。池田は牛がいますから、牛糞があるんですが、生ごみの堆肥は畑でなくなつてしまうんです。おぼちゃんらが使う畑に使つてしまうんで、とても田んぼには使えないんで、田んぼにはその牛糞をまいてあげています。それも農業後継者のグループにまいてあげたりで。かなり農業認定の店も増えまして、僕は小規模の方になってきました。

参加者 A どれくらい牛糞をまいているのですか。

伊藤 牛糞の量は半分しかありません、田んぼに。だから池田の半分半分に撒いています。有機の認定された田んぼの半分はまいて。この資料にはケイカルが書いてあるんですけども、撒けない田んぼは一年おきにケイカルを撒きなさいと。資料の「土作り」のところに書いてありますね。二年目から堆肥、またはケイカルを散布し必ず土作りをするということ。まあ、うちは自分で作った堆肥で

すけれども、他の人は、一牛糞はほとんど窒素分がありませんから、資料の後ろの「施肥のところに」あるように、有機アグレットで十アル当たり二、三十キロ入れてやっています。肥料的には有機アグレットって、いい有機肥料ができましたから、有機百パーセントのね、今はそんなに問題ないかなと思いますけれども。うちは自分で肥料作りますから、一反買えば七、八千円から一万円かかりますから、肥料代。そうすると、約百万ほどは自分で肥料作っています。今コスト下げるためにそういうことしています。

生ごみの回収、再利用

早川 あ、ひとつ詳しく教えて欲しいんですけれども。新聞紙に生ごみを包んで、それを決められた場所に置いとくんですか。それを集めて、全部池田町で消費するんですか、売るんですか。

伊藤 いやもう、売るだけはないんですけれども、月水金に役場の職員とか農業の後継者とか普通の主婦とか、ボランティアで出まして、朝の八時半から、大体十時ごろに終わるんですけれども、その堆肥センター、池田中ゴミステーションまで、積んでいって、まあかわいらしい絵のダンブなんですけれども、そこにあって帰るんです。そうしておくのと堆肥化して「ど根性」という堆肥が出来るんです。

早川 途中の管理は必要ないんですか。その放り込むところはほっとけばいいんですか。

伊藤 そこはだから公社が管理しています。農林公社が今は中心になって、このように指導もしていますし、「こぼい屋」の運営もしていますし、生ゴミの管理もし

ています。

早川 農林公社っていうのは人は何人くらいいるんですか。

伊藤 何人くらいですかねえ。まあ田んぼの作業をする人もいますし、今はできるだけ後継者を作って、田んぼを出すばかりなんですけれども。まあ僕のとこがいま一番わるいところで、足羽川のダムができるっていうと誰でも作る人がいないところにいるんですけど。まあそんな風にして、公社も田んぼもつくってま

すし、「こぼい屋」の職人も入れると、十二、三人いるんじゃないかな。

参加者B そのできた肥料は買うんですか。いくらですか。袋に入れたのを売っているんですか。

伊藤 そうそう。普通の、あの、ホームセンターにあるでしょう、なんとかのプラントーの土みたいな。あんな感じで売っています。ちょうど腐葉土みたいな感じですね、見た目は。

組織づくり

参加者C あ、いまその生ゴミ集めて、皆さんでと言われるんですけど、まあその仕組みづくりが大切だと思うんですけども、そういう組織。どういう形で作られたか、つてその辺ちょっと教えていただけますか。

伊藤 武生の「土といのちの会」でやったときも問題になったんですけども、どうするかですよね。そのきちんと出してもらおうの。バケツでするか。池田でもまずモニターを作って、各村にモニターを作って、最初バケツで出してもらったり、色んな方法を考えたんです。でも、面倒くさいのはダメ、手のかかるのはダメ。そうしていたら、いい方法として残ったのがその紙袋の方法だったんです。紙袋は

農協に売っていて、買うんです。それもだからそれも処理費用になって、一枚二〇円くらいかな。その袋は買って来るわけなんです。出してさえおけば、集めてくれると。最初はボウルが入っていたりね。だから、広報にこんなものが入っていましたって、写真が、最初は結構載せました。で、今はねえ、慣れてきたから池田の人も、生ゴミは資源やつて思えるようになってきましたけど、そうなるまでは大変です。確かに。この間もちよつと他の人が見学に言うので僕が連れていったんですけど、最後に袋詰めするまでに網にかけるんですね。ほつとやつぱり銀紙とか、ビニールのクズとかそんなのやつぱり入ってます。もう、少々はどうもならんのやつて、そう言っていましたね。

参加者C それで、なかなか、「やろかあ」では難しいんですね。どういう形で賛同する仲間を集められたんだらうかと。

伊藤 それが今の『環境四団体』をうまく作っていたんだと思いますね。その辺の仕掛けは僕はちよつとタッチしていないし、ぜんぜんわからないですけど、やっていった順番はそんな感じでやっていったんですね。それでいま環境が高まってきたので、そのボランティアを募る。で、募った人の相手が周りにどんどんかかると、まあいい方、いい方っていうのか、回転も速くなるし、何か、廻ってくるんですね。で、世の中いま、こういう環境の話をしてればいいし、いい時代になってきましたし。昔はね、本当に水やら環境の話しますと、笑われましたけど。

早川 最初の、ぼつと押すつというか、動き出すきっかけが何やつたか、そういう質問やと思うんですけど。

伊藤 まあ、僕ではないので分からんですけど、「あいつは面白そうなことしてるな」って、思わそうと思っていました。「土といのちの会」でも、市民と一緒に活動したり、百姓して、ただ稲の方ばかり見てないで、隣の人より米の取るのも下手や

し、ですけど、あいつはいい顔して百姓してるな、ってのは、しようと思っていました。ほで、まあ今は認定で池田の後継者のようになっていきますけれども、まあ池田に「多るさと十字軍」って、家を十戸建てまして、池田に二十年間住んでくれたらその家あげますよ、って。そのうちの最後の二戸に入った子が、僕のとこに最初訪ねてきて、その家でなくていい、どこか古い民家で良いので、僕のとこで百姓したい、って。まあその子もアトピーの子供を抱えてまして、かなり食べ物勉強もしていました。それで、一家、こちに来たいっていうんで、そしたら、ちよつと最後の二戸が空いていたんで、そこに入ってもらって。ま、今はもう、消費税払うようになったっていうんで、一千万はでたんやと思うんですけど。

僕が田んぼ始めたころは、四町超えるまでは地獄やったですね。子供は生まれてくるし、二町や三町の米とつても金にはならんし、仕事に行けば田んぼが手薄になるし、本当に泣きました。だから、子供が自立するときも、四町分けて、後は公社が田んぼを世話してやるつちゅうんで、まず食べれるだけにしてって思っただけあげました。今年美山のほうでも、一美山の上味見地区って、水害が一番ひどかったとこなんですけど、今はもう綺麗になりました。一、美山の子もときどき僕のとこ手伝いに来てくれて、今年から独り立ちしたいって言うんで、そこに四町ほどあったんで、二十五年ほど使わせてもらってましたけども、全部地主さんに、全部あいさつして廻って、独り立ちできるようにしてあげました。僕も両親の面倒みなくちゃあかんの、ま、そういう歳になってきたなって言うことなんでしょうけれども、ちよつと少し規模縮小して、まあねえ、一番すごい時は自分の家からこつちに二十キロ、こつちに二十キロ。田んぼの端から端までがあつたんですけど、今は大分縮小もしてきましたし、いらん四トン車なんかも去年手放しましたし、持っているだけで車検やらの経費がかかるんですね。で、去年放して、

二トンドンブにトレーラーで引っぱって歩くことにしました。そうすると米と糞と一緒に運んで行けるんですね。

野菜の場合はね、三反ほどあれば食べれるらしいですね。やり方によつてはね。そういう人の話も現実聞いてきましたけど。三反で七十品目作つて、年中作つて、まあ消費地に近いですから、やっぱり家で直売で、お客さんとちゃんつながつて、そうするとキッチンと生活はできるらしい。まあ田んぼの場合ね、特に田んぼはもう村と直結してるもので離しても離れないんですね。今はもう十四集落だけど、一時は二十集落以上の村とかかわりをもつて。まあ用水の掃除から今はもう猪が出てくるようになったんで、猪の電気柵したり。そういうごちやごちやを全部ひつくるめて、田んぼの場合は抱え込まなくちやあかんんですね。中山間地の補助金ももらえらるようなところですから、もらつて今集落への何とか色ん話をしてるんですけども。村の人は「おめえ任せ」つて言いますが、僕はダメダメつて言ってるんです。だから、できるだけ皆がちゃんと守れるような村、そういう集落にしようき、つていう話をして。ここ結婚して、子供生んで育てられるような土壌を作つてやらんことには絶対に次はない、そうしないと、みんな外に行つてしまふんやあから。そういうことが何かできんもんかなと、つて考えたんです。

参加者D 生ゴミで肥料を作るつて聞いたんですけども、その生ゴミつてというのは、野菜のくずとか鳥の骨とか色々あるんですか。

伊藤 あります。

参加者D それなんですけど、肥料になる野菜のくずですね。それが農薬を沢山使つた野菜だった場合つていうのは、土の影響とかどうなんですか。

伊藤 多分ね。まあかける農薬の按配もあるでしょうけど、生ゴミにしたら何千

倍以上にも薄まっています。だからそんな心配はいらんと思います。まあ、農薬を放り込むわけではありませんから。あの、そこまで心配したら、食べれるものはないと思います。

参加者D 三年間無農薬と…。

伊藤 JASですね、肥料は有機肥料で、三年間無農薬つていう規定があります。

参加者D JASの規格としては、使っている肥料までさかのぼるつていうのは、いまのところないんですか。

伊藤 肥料はさかのぼります。だから池田の生ゴミは、新聞紙で包んでるので新聞紙のインクが入っている可能性があるつていうんで、JASから認定してもらえないんです。JASは全てダメなんじゃないんです。池田の認証の場合は、全ての農薬ダメです。何を使つてもダメです。まあずつと、JAS認定をとっていたんですけど、金がかかるのと、池田で認証してもらえれば、わざわざ国に認証してもらう必要はないやろうつて、去年からやめました。廃止届けもすごい手間がかかるんです。ただ「やめました」ではすまないんで、まあ資料は五年間残しておかないとあかんし、その年に取つた作物——まあ一年間かけてみますから——その一年間のきちんとした記録簿も全部残しておかんとやめられん。やめた、ちゆうわけにはいかないんです。

参加者B あのこないだの新聞で、池田町では菜の花を作つてそれをしぼつて油をとって、それを給食に使つて、その廃油をバイオに使つてつて。その流れはどつていう風になつてるんですか。

伊藤 今度越前市の方でもひとつ会社を立ち上げたらしいので、NPOみたいな感じで、いろんな業種の人が集まつて立ち上げたらしいですけども。いま、機

械があるんですね。NHKのBSの「てくてく歩き旅」の中継車は、バイオディーゼ
ルを作るつくる装置も持つてる。そして行った先々で生ゴミと油をもらって、綺麗
にしたのをお礼に返して、動いてるって、見ましたよ。NHKの中継車にその生ゴ
ミの処理機と、バイオディーゼルを作る機械とを載せたんです。だからかなり機
械化されていて、レンタルでも貸してくれるらしいです。そのバイオディーゼ
ルを作る機械をね。てんぷら油でできるらしいですけど。ちょっとこないだ、池田のそ
の生ゴミ集めるトラックはバイオディーゼルでやってるんですけど、いまなんか壊
れてしまつて。ちよつとまたいい油じゃないんか、トラックの方が対応できなかった
みたいな話してました。

参加者B その絞るのは菜種の油で、絞る機械が池田にあるんですか。

伊藤 いいえ、ないです。それも製油会社にしてもらいます。焙煎して、そして絞
つてねえ。絞り機も買うと結構何百万もするし。その割にはそんなに菜種では
油は取れませんから。まあ、やりかけてはいますが。てんぷら油はガソリンスタン
ドにポリ缶が置いてあつて、そこに持つていけばいつでもリサイクルしてくれるん
です。そういう風に池田ではなつています。油ですからね、ガソリンスタンドで頼
むのが一番いいやろつていう。量が増えると、やつぱり危険物ですから。

早川 なんとなくみんなうまく協力してやつてるといふ印象が強いです。
なんでそんなにうまくいくのか。どう思われます。

伊藤 いや、分かんないです。僕もそんなに仲間ではないし。もう自分の事で精一
杯で、動ける状態ではないですけども、まあ元気ですね、環境四団体の人らは。
元気です。だから集まって色々考えて、周りの人らにエネルギーを与えますね。
それがすごいです。僕らは今はもう付いていっているだけです。思っていた事もで
きたのかできていなかったのか自分でもよく判らないけれど、まあやつてきてよ

かつたんやろつて。いまの池田の現状を見ると、そう思える、つていうとこで
す。とてもいま、自分がやつてきたわけではありませんし。でも、おばちゃんらの
エネルギーやら、女の人のエネルギーやは、すごいですね。

おばちゃんは元気

早川 暮らすというのは、当然お金が大前提で、それがくずれたら論外ですけ
れども、一番下に書いてあるこれ、これが何で実現するんかつていう。

(注記、会場の黒板に次の五つが書かれていた。

- 一. 私達は、だれにも恥ずかしくない本物を作ります。
- 二. 私達は、自然の営みを邪魔しません。
- 三. 私達は、喜びと楽しさを分かち合います。
- 四. 私達は、心を込めて匠の技を生かし磨きます。
- 五. 私達は、池田で暮らすことを楽しみます。(

伊藤 これは、ネーミングが上手や、でねえ。

早川 そりやそうですけど、内容がすばらしい。みんなこう思つて暮らしてると
でしょう、一応はね。

伊藤 いやいや、これはその、中心はおばちゃんばかりなんです。「二〇一匠の
会」の九十九パーセントはおばちゃんなんです。少しでも長生きして元気でいたい
なあつていうことやと思つんです。だから元気に少しでも、とつてもらえれば百
円にでもなるのだから、まあそれが楽しみで、元気でいてもらえればいい、つていう

もんでないかと。

早川 だと、これはおばちゃんらの意思表示みたいなもんですか。

伊藤 そうそう。そうです。合言葉、おばちゃんむけの合言葉みたいな感じ。

早川 おじさんたちはこんな元気じゃないんですか(笑)。

伊藤 だからおばちゃんにひっぱられていくんです(笑)。おばちゃんが山で何か取ってくるでしょ、すると軽トラ運転してついていく。そんな感じですね、うちの村でも。

参加者E 環境四団体の年代的な構成はどうなっていますか。

伊藤 年代ですか、年代はばらばらですね。若い主婦から七十代のおじちゃんまでいますね。だから生ゴミに感心のない人はまったく関心ないですよ。大きい村ほど生ゴミが出てこないって、農林公社の課長は言っています。うちの村で四十七、八軒ですけど、半分は出てこないでしょうね。三分の一か四分の一くらいかな、僕がゴミ出すときそんなふうに思いますね。出す人は毎週出しますが、感心のない人は出さないです。ない人にまでせえとは言いません。だから「やつてます、やつてます、いいですよ」って言っていると段々輪が広がっていく、という感じですね。年金のほかにちよつとすると、小遣い稼ぎしたかつたらこういうことしなさいと。すると、まあ、おばちゃんはやりにかかる、まあすごいエネルギー出すつとつう。

だから売り先を作ったのが、福井もつて行く、と面白いぞつていう発想やつたんですよ、つて思いますね。いまね。だから経費はものすごくかかっていると思います、むちゃくちゃかかっていると。うちやら農林公社が肩入れせんかつたらとても成り立たん商法やろうとも思います。まあ一億二千万くらいやつたけど、福井の直売所でそれくらいの上げあるのはいくらでもありますからね。まあ

僕も三つほど入ってますけど、あちこちに。僕は米は契約以外は売らないんですけど。まあ発芽玄米だけは出していますから。

参加者E もちろんそのおばちゃんたちがずっと活躍してたんでしょつけど、そのバックには町長さんがあり、公社があり、なんでしょうね。

伊藤 そうそう、そうですね。その仕組みづくりをされた町長や役場の職員はすごいなと思うんです。前から頭がいいとは思ってただけ。

参加者F 「一〇二匠の会」つて言うのが、本当に、こう、どうやって、組織として作りあがつていったのかつていうのが……。道ばたで話してそういう思いを持つている人は一杯いるんやけれども、それをひとつの組織に作り上げていくつていうのは、大変なことやと思うんですけれども、なんでこんなことができるんか。

伊藤 それは町が農林公社が動かして作った。農林公社が売場所を作った。先にシステムを作つてしまった。

参加者F それに乗つたつて……

伊藤 そうそう。さっきの話、池田のもんやで農業かかつてないやつつて、有機栽培やろつて、勝手に思われたんで、何とかしないと、教育しないとつていう風に変わつていったんですね。それで作った。だから最初はおばちゃんも農薬使つてましたし、だれも気にしていませんでした。

早川 行政指導なんやね、一番最初はね。

伊藤 そうですね。システムがあつたんですね。

参加者E でも、その無農薬に、つてみんながこう、多分、課長さんが先にそう思われたのかもしれないけれど、皆さんがそうやって従つて本当のものを作つていかれたのはすごいですね。

伊藤 それは、だから認定してもらえないし、そうでないやつは出さないでくだ

さい、もって行きませんか。あの、今はそうなってますから、きちんとシールの貼っていないものは出さないでくださいって書いてあるんですけども。

参加者 F すごく上手なシステムを作ったんですね。

伊藤 だから、そういうのを公社の女の子もはきり言います。持つていつてもらうためには検査を受けにやらんし。そういうことなんで。ダメだからダメだよって言われるので。

無農薬、減農薬

参加者 G この米の栽培指針は池田町独自のものですか。

伊藤 そうですね、米に関してはそうですね。減農薬、有機肥料ついたら農薬は四成分まで。だいたい普通の除草剤で三成分までかな、まあ二成分くらいまで蒔いてますけど、するともうもうあと二成分しか使えん。イモチなんか出たときにはもう使えないから、最初の消毒から減らしながらでないと、減農薬としては該当しないんです。県の指針もこんな感じですよ。

参加者 B うちの畑は完全な無農薬なんですけど、ある人にね、ちよつと知った方ですが、「わたしのところはぜんぜん使っていないし、もう今年で二十一年になるんです」って言ったたら、「ふーん。ほやけど無農薬ってなんも蒔いてないっていつても、そんなみんな上手いこと言うけど、夜のうちにみんな撒いとんなさる」って言われるんです。その残留農薬っていうんですか、池田の方は廻つて歩いて、調べて歩いて、やっつてらっしゃるんですか。

伊藤 はい。あの、いくつかピックアップして、残留農薬を調べています。だから無差別に引つ張り出したのを送って、調べてもらってます。油断させないというか。

いや、僕らも言われました、最初は。「隠れて薬ふればいいのに」とか。草茫々を見るに見かねてね、心配して言ってくれているんですけど。僕は、「ふつたんやろ」とか、言われました。

参加者 F 確かに、そんな人がおるから、そう言われるんだと思いますね。

伊藤 僕はお米を食べてもつてるんやけど、やっぱ、自分っていう人間を買つてもらつてるんやな、という思いを離さないようにはしているんです。最初に、あつちに行つてそのことを商売で叩き込まれましたんで。普通のセールスマンでもそうですわ。おんなじ車を買うんやけど、そのセールスマンを信用して買うんやから、同じメーカーの車でもね。多分そういうことやと思うんです。だから自分を売る、自分を買つてもらおう、ついでに気持ちが必要なんやなと思つ。

参加者 G 池田町ではEM菌は使っていないのですか。

伊藤 僕はすつとしてましたけど、EM菌を使わなくても上手く発酵するから、もう今は使つてません。EMの考え方は使つてますね。やっぱり嫌気性発酵の考え方というのは一理あるし、肥料の力がぜんぜん違います。六ヶ月か九ヶ月した「ど根性」でも、いつてみればエネルギーが燃えてしまうんですね。だから光熱は出るんですけども、撒くときはワツとなりませうけれど。本当に鶏糞が漬物みたいな匂いになるんですから、甘酸っぱいにおいがして。撒いているときは幸せですよ。

JAS認定

参加者 G 私はしてないんですけど家内がね、EM菌を家庭菜園で使つて、有機栽培の認証とつてたんですよ。JAS。二年間の日誌から遡つてはじめて認証がで

きるようにするんですね。二一年の畑に、ナスビや大根やトマトを作るんですけれど、全部ひとつひとつ検査があるんです。周囲の検査、苗の検査、大根の検査、じゃがいもの検査。邪魔くさいったら、もう、日誌の手間と……。

伊藤 まあそれはね、パソコンで作ってもいいんだけど、その検査官を呼んでくる旅費と日当はこっちが払わないとあきませんし、その自分らが作った帳面を向こうが管理してくれるでしょう。その管理料も取られるんです。

参加者 G 同じ畑なら同じやろうと思うんですけど、大変なこと、ひとつの畑をEM菌でやっても、そこにナスやトマトやジャガイモがあると、それのひとつずつについて、いつEM菌をやってもいつ起こしてと、もう全部ひとつひとつの日誌がいるんですよ。

伊藤 そうです。一作物ずつです。そして周りに緩衝地帯作って、他からの水もきちんと管理しなくちゃあかんし、上水道は薬で消毒してあるもんで。

参加者 G 地下水や雨水はいいが上水道はだめだという。

参加者 G 有機栽培のJAS認定なんか本当に大変なものや。

伊藤 資材の証明書は全部取らないといけないんです、資材の証明書は。化学物質は混ぜていません、って保証書をとらないといけないんです。

参加者 G だからやるのはやつてるんですけど、認証は取ってないんです。

伊藤 あれば役人が考えた法律やで、とにかく難しくして、少しでもする人間を減らそうと思ってる、と思います。きっと。百姓にはとても管理できんような、庶民のやり方でないものね。もう役人が作るような書類やもんね。調べに来たって、見るだけでしょ、見るだけです。書類しか見ないんや。何がおちてる、これがありますか、って。ほんなのばつかしで、うんざりする。

参加者 G あの、トラクターとか、コンバインもそうですけど、普通の田に行っ

て、有機栽培の田に入るでしょう、これがスーッと入れへんがな、そこで一回一回洗車しないといけないんや（イヤー、大変、笑い、など）。土が混じってはいけな

伊藤 そう、そして洗車の記録もつけないかん。

参加者 G そんなで洗車の記録つけて、写真つけて。でまた綺麗にしてから、上げれるん。

伊藤 よその田んぼの土持つて入ったらあかんって言う。

参加者 G 春一番に入るのならそれでいいが、その後何べんも入らにやいかんでしょ。ほんまに、大変なことすわ。

伊藤 だから書類さえそろつていれば文句は言われない、まあ確かに。できた品物も一緒に積んでおいたらダメなんです。「有機農産物」って書いて、別々にしなさいって。一緒なところに積んだらダメですと。あとから積んだらダメです。まあ混じる可能性があるからとか、役人的な考え方なんです。百姓はそんなもの混ぜませんしねえ。でも、絶対一緒のところに置いたらあかんのです。本当に異常です。それなのに見逃しがあつたんでね、捕まつたんです、JAS法違反で。だから今はそういう認証は県がタダで認証してくれますからね。無農薬シールと減農薬シールとくれますから。それでもいいんかなと思うし。JASも本当やりましたけど、もう、やめました。

参加者 D 海外でも同じような認定があると聞いたのですが、中国と日本のJAS認定って違うんですか。

伊藤 一応、世界統一基準のはずなんです。ただ、中国のJASの竹の子から農薬検出されたっていうのがこないだの話じゃなかったですか。だから「まかそう」と思えばいくらでも「まかせる」というのを逆に言っているような気がするんです

けれどもね。真面目にやってる人間ほど頭にくるといふか。

早川 あ、さっきの話の途中でね、伊藤さんが「百姓は百姓の言葉で世間に話さないよ。世間の人は意外と知らん」と言われましたが、それはどういうことやつたんですか。

生産者と消費者

伊藤 まず「土といのちの会」に行くようになって、消費者の人とじかに話をするようになって、例えば町の人だったら、農家は土地も沢山持つてて財産もあつて、みたいな思い方をしていたり、さっきみたいに「まかして農業まいてるんやろうつて、思つてみたり。だから、一緒に、真剣に農の事を考へてやるやつもいるんやぞつて」といふ話をしていく、つていうんかね。やつぱり同んなし場所で子供育てて生活している同んなし市民つて言うんですか、あんな農家やから、あんなおかししいんやから、みたいなことになること自体がおかしい。特にそうやね、さっきの農業の話みたいに、汚染する側とされる側みたいな、どうしてもそんな話になつてしまつて。やつぱり一緒に活動するつていうのが大事やなつて思いましたね。

参加者B 名田庄でも荒らされた田んぼがありますね。あれをなにかこう、なにか作つて、いい田んぼにできるつて方法ないですか。

伊藤 僕らも最初はね、米作りから入つた。ある程度米作りで生計をたてて池田の特産を作つつかと思つたんです。ほつたら田んぼが増えたら、そんなことできないですね。だから今の「こぼい屋」みたいに、沢山のおぼちゃんにしてみらう方がよつほど特産になつてきたんですけれど。なんか特産物作くらな、みたいな思ひがあつたんですけれど。だから田んぼでもいいです。田んぼでもいいんで、なんか

田んぼで生計たてていかなあかんと思うんです。だからそれは面積でもあるやろうし、世間で言われているように、外国が入つてきたら一万で作くらあかんやろうし。うちんこでは一万で作れるか作れないか、からいかなあかんのやろうと思うんです。まあ経営の問題になつてくると思ふんですけど。僕はそういう大百姓らと付き合ひができたから、「あ、これは到底一緒に勝てないや」と分かつた。でも池田の農産はスーパーに卸したりして、やつてるんです。逆に僕のやつていた方へ踏み込まれてくるんですね。やつぱり生き残りをつけていくと、そうでないと守つていけないところがあつたと思うんです。だから例えば園農でもいいんやろうし、少々ならね。沢山なら、僕がしてきたのは直売で、食つてもらつてお客さんの欲しい米を作る、それでうちは生計を立てさせてもらつて仕事を思ひつたつていふ感じですね。

ただ、普通に一般米価の上がつた下がつたとか、穀物飼料がどうのといふんですけど、始めは僕もすごいそれに考へさせられましたし、振り回されました、農協なんか必ず「米価が上がりました、下がりました」つていつて。でも関係ないんやね。うちでとれる米二百俵でも三百俵でも食つてくれる人がいて、うちが生活できたら、穀物事情なんて関係ないことなんです。本當いつたら。だから池田でも僕よく言つたのは、池田でも二万俵しかないんなら、二万俵のお客さんさえいればそれ以上関係ないんやと。どう穀物相場が変わるうが、二万俵きちんと食つてもらえれば、池田の農業は守れるんやと、昔から話したことがあります。そうなつたら気が楽なんです。自分がちゃんとして、米作つて、ちゃんと届けて、なんて言うか、こう、難しい農業行政とかあるけど、毎年変わる猫の目農政つて「ころころころ変りますからねえ」、振り回されてると、お先真つ暗の思ひしかないけど、食べ物まきちんと作つて、まきちんと食つてもつて。だ

から大儲けはできないと思つてますけど、生活は可能なのではないかと思つてます。

参加者 A 長いこと奮闘されて、色々農政事情つてのは変革してますよね。大変厳しいと思うんですけども。僕たちはまったくわからないんですけど、何が、この国、あるいは行政にね、長いこと百姓やつてね、「いまこれやつて欲しいな、こつたらいいやろうな」つていう思いとか、あのように、このように、そのような、つてことがちろつとでも一言でも二言でもあれば、参考になるんですけど。

伊藤 あのね、思つたのは、一時イギリスが食料自給率がものすごく落ちたらしいんですけど。今は八十パーセントほどあるらしいんですけど、やっぱり市民が気がついて、農業守らなくちゃあかん、緑を守らなくちゃあかん、つていう総意が出来て八十パーセントに上がったわけですね。いま日本は四十パーセントしかないでしょう。で、いくら農家守ろう守ろうと言つたかつて、自分で金稼げるようになってからと思われているようになってるし、農林省がいくら言つたつてダメなんです。本当に緑の山河を残そうつていう総意がなけりや、ますます過疎はとまらないし。今気がついてどんどん池田に若い人が来てくれますけど、三人や五人増えたかつて、とても止められんと思つてます。まあだから、せめていい顔して、ここががんばつて子育てることかなと思つてしているわけですね。

僕が百姓しようつて最初思つたのは、昭和四十年、ちょうど減反政策が始まつた頃なんですね。もう百姓あかん、百姓あかんつて。田んぼにいらのはじいちゃんばあちゃんだけです。そんな話ばかり聞いて、こゝで百姓で食べてみせようと思つたのかもしれないですね。足突こんだから思つたのかもしれないんですけど。

参加者 C あの、青年団のことで訊きたいのですが、誰がお嫁さんが来たとかあるんですか。それともそういうつながりで色々な農産物が関西に売れるとか、そんないいことありましたか。

伊藤 そうですね。まあ一人紹介してもらつたんか。結構お嫁に來たいつて言う女の子もいました。だからあれやつたことで自信が持てましたね、池田にいる男連中が。もちろん女の子も負けずに入つてくれたりしましたけど。面白いのと、マスコミが流してくれるとまた楽しい。

早川 「体験ザ百姓」つていうのは、いまでも続いているのですか。

伊藤 いえ、もうやつていません。最初十年くらいはやつたんだと思つですけど。そのくらいです。

早川 それは人がこんようになつたから止めたんですか。

伊藤 いや、もう止めようつて話が出て……。そのころは僕も農協青年部は辞めていましたから、もう判りませんが。続けられんようになったのかな。まあ結構あとは子供なんかも入れたりして、結構盛況は盛況だったんですけど。今はFBCの「春田んぼ」つていうのを五月の連休ですかね、四月の二十九日ですかね、タニシの佃煮こやしたり、あれはまだずつとやつてますね。あの頃から競合してたんです、負けてなるものかと一時はやつてたんですけど。

早川 上中なんかではね、若い人を呼んでどうか学校みたいなのを。ああいうのは、池田にはないんですか。

伊藤 ああ、農学舎ですね。ああいうのはないですね。研修者を受け入れたり、後は農林公社に入ったり、公社の職員になってますけどね。

参加者 F あの、おばちゃんがやつてる、「二〇一匠の会」ですが、後継者を作らなければ、せつかく作つた良い会が継続していかなくなるんですけど、そのあた

りの、後継者作りなんか、工夫されていることはあるんですかね。

農業で生計を立てる

伊藤 僕はそれが一番ネックと思いますが、ないんです。なんでやゆうたら、おばちゃんは百円でいいんやね。自分の作ったもの百円でいいんや。孫に小遣いやればいいんやから。でも、僕らは百円で売ったんでは子供らを学校にやられんや。やつぱり二百円か三百円もらわんと。やつぱりその辺のことで。最近は何格表をつけようとしとるんで、ああいつも変わったんやなと思っただけど。

だから僕は今の米は僕しか作れないから僕の値段で出せるんだけど、一緒にほうれん草作つてたら、百円じゃとてもね。だからそのへんのところは分かつてきたのかな、どうなのかな。だから僕は公社そのものを信用していないといえはおかしいけど、身を預けられないなって。お米も池田共同ということ会社を作りまして、池田の米は「池田米」で全部売るように去年からなつてるので、一俵でも出してこれって。価格設定は、僕が最初につけた価格設定そのままなんです。無農薬米で一万円。減農薬米で六千三百円。あれ、どつかで見た数字やなと思っただけですけど。僕のつけた値段をそのままつけて売ってるんですけど。

去年は米の集まりが足りなかつたので、一俵でも出して、言われているんですけど、今年を買う、来年はいらないでは、うちの生活はなりたたんのやから、それが農家や、つて、そういう話なんかも消費者にするんですけど。しないと、工業製品と農産物は違つていうのをまず分かつてもらわんと。「こつぱい屋」で農業続けていかなければならない事実を分かつてもらわないといかんと思うんです。まあ今はおばちゃんら元氣な間はいいけど、次から次から来ているけど、相対的に人口は減つてますし。これからは同じ「こつぱい屋」に物を出しても、ちゃ

んと子育て出来るようなふうにしていかな。「こつぱい屋のあるベル(＝シヨッピングセンター)の中には平和堂が入っているんですね。平和堂の大根が二百九十八円でも、「こつぱい屋」のは百円で売れるんです。当たり前前に売れるんです。いいも悪いもないと思つて売つてるんやと思っんです。おばちゃんは百円でもいいんやから。それではダメなんだというか。若いもんが子育てできる環境ではないな、つて僕は思つてます。だから僕は独自の価格設定をして、ずっとやってきたままでいるということですよ。

早川 だから、この会は生活というよりもちよつと小遣いを、経済的な話だけで言うとな、小遣いさえ入れればいいわつていう方が強いわけですか。

伊藤 そうですね。それがないと品数が集まりませんから。そんなところもあると思うんですけど。いま若い人が率先して「こつぱい屋」の品物をビニールハウスで作るんやつていう風にはなつてません。カンタケくらいですかね、冬はハウスが空きますから、作つてますけど。真剣に野菜作りしている人はいませんね。

除草

参加者H 農薬を使わないでやつていらつしやるのですが、一番、まあ、除草が悩まれとると思うんですけど、どういう方法で解消しておられるんですか。

伊藤 北海道の畑作会社が甜菜なんかから作つたのがあつて、それを取り寄せてやつてみましたが、間に合わなかつたんですけど。まあ時期を狙つたら綺麗に抑えられましたね。雑草の勉強もかなりしまして、叩く時期に叩いたらあんまり心配ないんですね。だから草が見えてからじゃ遅いです。蒼いなあ、つてなつたらだめです。だからひえなんか特に、芽の出かけ。発芽玄米の発芽状態が植物は一

番弱いんですね。だからそこを叩いてやる。今は田植え機の後ろにつける中耕機、除草機、あれを三遍いれました。三回入れた田んぼは成功しました。二回しか入れなかった田んぼは失敗して、前の人に色々言われました。今まで色んな事やりましたけれど、かならずいいとこが、いい田んぼがあるんですね。あかん田んぼもあるけど。どっかい田んぼがあるんで、望みを捨てずにこれたのは事実です。でも他から見れば「あいつの田んぼはひどい」と。どの田んぼも変わらないですから、よそから見れば。しかし、自分に見れば今年の田んぼはよく出来たな、つて。ずっと試行錯誤してきましたけど、いま機械で強制的にやれるのは強いですね。

参加者H 田植え機にそれが付くのですか。

伊藤 うん、それはあの、トラクターの後ろのロータリー取り替えるでしよう、がちゃんがちゃんと。十分もあれば取り替えられますから。去年までは深い田んぼでやつてたんで、機械が動かなくなり、だんだん土が固くなるんですね、二回目三回目になると。それで今年はもう田んぼを変えようと思ってるんですけど。まあ減農薬やつてたんですけど。で、倉庫に一番近いところで、まとめて。倉庫に入る機械対応でないと。今二町ほどしてますから。

参加者H あ、二町だけなんですか。

伊藤 そうです。あとは減農薬。百パーセントはとても出来ません。あとは減農薬です、除草剤を一回だけ使います、三成分だけ使います。八割減として売ってますけど。

参加者H 収量はどんなもんです。

伊藤 収量なんてありません。恥ずかしくて。

参加者H 六表くらいですか。

伊藤 平均六表とれたら生活は楽なんやろうけど。ちよつと今は平均とれないですわね、水害からこっちは。土が変わってしまったんと、なんつうのかな、田んぼに直してもらつて一年はずいぶんできて、十俵以上もとれる田んぼもあれば、四俵くらいの田んぼもあるし。

参加者H 土地改良したあとは取れますね。段々とれなくなる。

伊藤 ちよつと専門的になりますけど堆肥の敷き藁も、鋸屑を使うようになつたんですね。ちよつとそれが肥力として出てくるのが遅いのかな、だから今年はまだもう百キロよけいに入れようかな、と思ってるんですけど。

参加者H その減農薬のほうも、そんだけあんまりとれんですか。

伊藤 まあ、人並みくらいにはなります。まあいま池田中がね、こんなになつてきて、自分も米とれん、つて大分言つようになつてきたんですね。米がとれん、つてね。まあ、有機肥料の使い方がまだ分つたらんと思うんですけど。僕が米取れんのに、あんまり人に米取れとは言われんしね。

参加者H あの、農協に福井有機つていうて、言うのが、あれは有機……。

伊藤 ああ、ありますね。あれは有機五十パーセントでしよう。あとの五十パーセントは化学肥料やつたと思うんです。だから、減化学肥料つていうかつこうですかね。

参加者G 除草にね、米ぬかをふりました、非常に良かったです。

(会場から、二町はふれんてしよう)

伊藤 ああ、それでしよう。オンちゃんに頼んで、僕が田んぼに行つて一反百キロずつ置いておいて、オンちゃんに蒔いてもらたんですけど。一年しかあきませんでした。可哀相で。田んぼのなみ米ぬかもつて蒔いて歩く、まあ確かに広がつてはくれるんですけど。ひでえ大変なことです、いいんですけどね。

参加者H 台鴨は・・・

伊藤 それも考えたんですけど。ちよつと、やつぱりきちんと囲えればね。あれは電気柵の柵で囲わないとあかんので。

参加者H 上からもカラスが来るし……

伊藤 綿のマットに種籾を撒いてやったこともあります。それもね、ちよつとテレビ局に電話したら取材に来て、それでも大失敗だったんです。綿に種が蒔いてあるんですね、列になつて。ひいて水張つて、浮かばしておくんですね。草が生えて、生えきつたところで水をとつてやると、稲は上で伸びるし草は下で伸びるし、で、除草が出来るって考えなんですけど。水が下に落ちてしまったんです。それで一回土にくついたらもう、ダメなんです。草と稲と一緒にごちやごちやです、大失敗しました。

参加者H ちよつと大きくなると、もう稲なんか草に負けてしまう。

伊藤 負けてしまう。昔はおばちゃんら、何十人も雇つてやつてもらっていたんですけど。もう色んなことしました、無農薬に関しては。

参加者G 先ほど話がありましたけど、後継者の問題は大きな問題だと思っんです。名田庄地区ずつと見ている、いまやつぱり八十代でも現役で百姓する人が多いですね。しかしその家の息子さんら、あるいは下がおらんわけやね。いたとしても、われわれのようなサラリーマン上がりで、百姓みたいなもんようせん、とか言つて放棄するかたちです、そういう若者がいても、百姓するものはない。

伊藤 いやほんとサラリーマン並みの収入があげられれば、するんでしようけ。だから難しいところなんですよね、そのへんが。

参加者G 名田庄なんて今にもうほとんどがなくなるんでないかと思われま

ね。

伊藤 池田もその危機感で農林公社を作ったと思うんですけど。一時は農林公社もかなりの田んぼ集めてやったんですけど。まあ今はね、機械を持たしたら田んぼするつて人間が増えましたけれど。専業農家も大分増えてはきました。

参加者G 消費者がもう少し、こころ、変わつてこない、難しいんです、やつぱりあの、規格外の野菜とかね。同じもの、同じ野菜しか売れないとか。米にカメムシがいたらもうダメとか。消毒しないとカメムシ入るんですよ。

伊藤 入ります、入ります。うちらにも入つてます。

参加者G だから薬をやらないと、供出出来ない。

伊藤 千粒に一粒で二等米になつてまうでしょ。二粒あつたら規格外ですからね。そうです、色選別機かけたら。あれは米屋が儲けるために、文句をつけるために設けているだけなんです。現実には。僕も中士ですが色選持ってますが、とても取りきれません。中古やで。ま、いまはこの農業でもたいてい持ってますけどね。

参加者H 農協は航空防除を三回せい言うて、おまけに色選料までとるんや、三回するやつおるんや。で、色選の代金も払えつて。滅茶苦茶言う。

伊藤 確かにねえ、いつしよに蜘蛛やら蛙やらも死にますからね。害虫だけが死ぬのではないというのが……。

参加者G うちの田んぼは、昔のイナゴ、本当によろけおるんですわ。とにかく、よろけ虫がおるんですわ。

参加者H 今の農薬はそういう優しい農薬なんで、だからイナゴには……。

伊藤 毒性が伸びててね。直接毒ではないんですわね。

参加者H イナゴが増えとるよ。

参加者 G 蛇までおる。

参加者 H それと、トンボが、農薬使ったところからトンボがわいてきよる。そんなけ農薬は優しい。

伊藤 そうですね。だからなお怖いんですね。直接出てこないから。昔のはすぐに薬のせいやと分かったけど、今は何十年経たないと出てこないっていう。だからアレルギーとか、そういうのは、そんなことなんかなくて思うんです。

参加者 H 余計わからんようになってる、悪いことが。

伊藤 そうですね。

参加者 H トンボが羽化するようなのだから、どうもないと思う。

参加者 G この資料の中の「栽培指針」に、「銅二(舞いけだ)つてあるんでしょ。これは、この、一番フンクが下になっていますが、いま現在の普通に作っている米とどの程度いいんですか。

伊藤 変わらんと思います。これは池田の人を教育するために、ここからはじめさすんです。いままでと変わりませんよ。ここから始めますよ、でも、ちよつと農薬の成分を考えようとか。少し考えて、してもらえば、「舞いけだ」称号をあげますよ、つていう。まず階段の一段目を作ったわけです。上の三つは減農薬と同じですけど、一番下は池田独自の、まず階段の一段目を歩んでもらうために、こういうのを作ったんです。

参加者 C 農薬の九成分が四成分になっているのはね、明らかにすくなくなっているような気がしますね。

伊藤 ああ、そうそう。

参加者 C 最初の九成分は、いったい何成分の九成分か。

伊藤 福井県の指針では、十九成分が普通栽培ということになっています。始め

の種殺消毒から始めると、概算していくとそれくらいになっていくんです。二十近くなるんですね。全部農薬を使っていくとね。だからうちらでも三成分以下にするっていうのは、一生懸命やっていて、大変なことやね。

参加者 C 十九成分を減らしていくって大変なことじゃないですか。

伊藤 今はよく効きますから、九成分も使ったら充分、もう普通通りに出来ま

す。

参加者 H そのね、除草剤がうまいこと効いたら、もうこんなの使わなくてもいいやね。

伊藤 ええ。あとはもう酢を蒔いてもいいですし、木搾撒くのもいいです。

参加者 H イモチなんか考えんでもええ、ならへんねんから。

参加者 C まかないと気がすまない方もいるんでしょ。

伊藤 そうそう。それは農協の言った通りにまかな取れんと思ってる人もいます。でもそれは変わってきました。

参加者 H そんな言われたとおり、あれもやりこれもやりしたら、めちゃくちゃになる、経費もかかるし、県の言うことなんか聞いていたら……。(笑)

伊藤 経費がまず、ガンーと上がりますからね。

参加者 H そんなもんやつとつたら、ごっついお金かかって、米安う安くなる。

参加者 G 百姓はもうちよつと勉強せんとあかん。

農薬の将来

伊藤 そうやと思います。肥料の事も、農薬の事も。やっぱ自分が勉強せんとアカンと思えます。

参加者 G 私はもう四十年余り百姓やとりりますし、田んぼにも入つとりりますけど、一回も勉強したことありませんよ(笑)。イヤほんとに。

参加者 H だけど稲と話できるやろ。

参加者 G いやー、できませんそんなこと。農協さんの言ったとおり、彼がいうた通りにして…。

参加者 H そらあかんわ。

参加者 G いや、だからそういう人が結構多いんじゃないかと思うんですよ。百姓の中には。農協が決めた通り、「ああ一発いい肥料がありますよ」「そうか」「ほら一発いいがありますよ」「ああ、そうか」って。(笑)

伊藤 そうそう。(笑)

参加者 G 判断能力が全然ない。売る場所もせんせん考えない。ただ、農協自分の作ったものを出して、だめだつて言われたら「ああそうですか」「いくらですか」「ああそうですか」「いくら出したか分からんし、いくらになったのかが分からんのが今の現状の農協の百姓なんです。だから百姓やつぱりダメなんです。自分、これだけががんばつて作つて、いくら出来たのか、いくらお金になったのか判らない。そういう政策なんです。

伊藤 そうですね。ほんとうにね。

参加者 G 本当におかしいですわ。

早川 それは百姓だけで生活しなくてもいいからなんじゃないですか。ほかに現金収入があつて。

参加者 G それは現金収入が全然なければ出来ないうですけど、それにしても今年の米価がいくらと決まるのは、奨励米、奨励金とか、ともかく三年間かからないと今年の一俵の値が出ないんですね。農協では。それから自分の作った米がど

れだけあつたのか、それも三年たたないとわからない。うちは、農協がとつてくれないんで自分で売るので、一升の値がいくらから分かつているんですけれども。しかし、分かつてないのがほとんどです。しかし、一生懸命作っているのは作っている。ただ、考えずに、農協のおつしやるとおりに、天の声として作っているんです。

だから、やつぱりあの、時代遅れだと思つて。もうちよつと池田町のように、町を上げてですよ、他のことでも、有機栽培でもなんでも聞きたいと思つているんですが、名田庄の米っていうのは、—こんな狭いところに三千人しかいないんですから—、もう名田庄では農薬を買えない、売れない、そういう町になつたらええなあ、と思つて。名田庄の米や大根やきゅうりは、すべて、誰が作つたのもんであつても自然栽培のものであると、ゆうふうな形に、もしなつたとしたら、「名田庄」つて書いただけで、みな売れていく！ 僕、そういう風に、常に思っているんです。自分がやらなくてもいいんですから。(笑)

伊藤 僕らもそういう思いやつたんです。あの名田庄商會がね、月に一個ずつ、漬物を開発するんですよ。すげえなあ、俺らも負けてられんなあ、つて。本当に名田庄がライバルやつたんです。確かにほんまそんな町になつたらいいなつて、思いがずつとありました。

参加者 G でも池田町は合併もしなくて、がんばつて、つぎつぎに、堆肥を作る、何をするつてかたちで、よく耳にしますし。ニュースも聞きますし。

伊藤 だからだから、これは上手いんですつて。(笑) ま、とにかくニュース性のあるものを。これは地域振興券もそうです。日本一やつて。結局町は、これに関してお金は五、六百万円しか出していませんからね、一人二千円の三千人やから。そして余分にあつたのが六十万やつたかな？ だから、大した金は使わんけど、宣伝は上手。

参加者G だからね、そうやって小さいことを、池田町の中でいろいろお話を聞くと、「いやー、そんなことないです」と、やっている風にはおっしゃらない方がたくさんいらつしやるんです。ちよつとギャップがあつておかしいですね(笑)。

伊藤 そうです。ギャップあります。

参加者G ただ、ニエースで聞いている池田町というイメージが。池田町はがんばってるなあつていうのは、やっぱりあります。合併しないで、自分で自生努力してがんばってる。だから町ぐるみでがんばっているという雰囲気があります。けど、地元の人に「がんばってますね」というと、いや、ほんなことないつて。そこらへんがちよつとね。

伊藤 そりやもう、坂越えて、サラリーマンが一番多いですし、池田の一番大きい企業は役場です(笑)、その次は農協ですし。

参加者G 池田がうまくいくのも、あくまで福井市という荘園が近くにあるからですね。

伊藤 そうですね。おばちゃんらを集めてあるこうつていうのが、本当に酒飲んでるところからぼつと出たのができたというのが……。

参加者G 私の同僚が大野におるんですけれども、定年退職してから始めた。大野の中で、道の駅などで、売っているんだけどあかんと。それで福井に出すようにした。ほかのひともみな喜んで出すようになった。毎週、一回かな、もうトラック一杯に積んで、片町まで持つていつて。ほんな大野みたいところで売ったのでは全然あかん。池田町にも福井という大きな消費地がありますから。だから名田庄を思いますと、小浜ショッピングで、などと、今さつきから思っていたのですね。

伊藤 今はインターネットもあるし、まあインターネットでヒットしようと思っ

たらものすごく難しいんですけど。まずは見てもらえるようにせなアカンし。このころ信用はなかなかしてもらえませんが。どこにもあるでね。ただ、僕も一歩早かったからこんなこと言つてられるんで、遅かったら僕の米なんかとても買つてもらえなかったやろうと思ひます。先に声かけてもらえたのも幸せややなと思ひます。

早川 うちのジャガイモ、美味しいんでね、インターネットのオークションに出そうと思つてね。「ジャガイモ」で検索したら、うわーっ！(笑)、出てくる！そんなところなんかに入る余地なんかい。全然ない。そんなところでうちのジャガイモだけ取る人なんか、ありえんと思つた。だーつとあるから。

伊藤 包装もかかりますし、運送もかかりますし、そりや結構経費はかかります。やっぱり一番のお客さんはロコミです。ロコミのお客さんは固いし、信用した人が、信用してもらつているから、本当にお客さんはありがたいです。不作の年に一度倍ぐらに増えたんですよ、お客さんが。やっぱ、そのお客さんは、一年か二年でしたね、よくて二年で消えました。昔からのお客さんが残つてます。だから工業製品と農業製品は違ふんですよ、つて話を常にせなあかんのやろうなつて思つてるんです。

早川 だぶん時間がきましたが、何かありませんか。ないようですので、それでは、皆さん拍手で伊藤に礼を言いたいと思ひます。

(拍手)

伊藤 ありがとつございしました。

資料

一. 講師

伊藤弘文（福井県池田町 米作農家）

二. 日時、場所

平成二十二年三月十四日、名田庄村山村開発センター

三. 参加者（五十音順）

司会 早川博信

小川宗一（名田庄三重）、木戸口武夫（名田庄井上）、木村光広（おおい町万願寺）、治部ひろみ（名田庄虫鹿野）、近間道子（習志野市）、中野岩二郎（名田庄納田終）、萩原茂男（名田庄下）、早川真理子（名田庄三重）、松宮重信（おおい町岡田）、森本小夜美（名田庄久坂）

メ
七

参加者A 小川

参加者B 真理子

参加者C 大飯、男性

参加者D 道子

参加者E 冶部

参加者F 森本(f)

参加者G 中野

参加者H 大飯、男性